

広島俳句倶楽部

令和三年十一月作品集

露の玉

高尾ひとみ

秋の山里を訪ねました。蜻蛉の後に先になりし
て澄んだ川を辿り、大きな通草を見つけては摘み、す
こしずつ広がる青空や道端に咲く花を見、夕暮れには
近くの山に月の上るのを待つて、自然の中に溶け込むよ
うに時を過ごしました。

翌朝、川のほとりを散歩すると、道の両側の草や花は
みな一粒ずつ露を垂せています。その露の一つ一つに朝
日が差して、それはそれは美しいのでした。こんな綺麗
な朝を迎えたのは、初めてでした。

野分去りなほ霧雨のつづきをり

川土手の小さき花に秋の蝶

川沿いをゆけば虫の音とぎれなく

稲の香や山家へと日の差し始め

見おろせば里いちめんの稲穂かな

紫の花いろいろに秋野かな

釣り草つりふねに川の流れの細きかな

月白のほらあそこにと人の言ふ

露の夜の言葉少なに更けにけり

葉に花にひとつひとつや露の玉

《作品鑑賞》

村上正人

高尾ひとみさんは、特別作品を創られるにあたり、日常か
ら離れたところに身を移し、そこに丸一日あるいは数日身を
置いて創作されるようだ。それはまさに、尊敬する師である
佐保光俊先生の創作姿勢に通じるのである。素敵である。

野分去りなほ霧雨のつづきをり

最近の台風は去った後、台風一過のような晴天をもたらすこ
とが少なくなった。「なほ霧雨のつづきをり」という時間の経
過を表現して、このたびの野分をさりげなく特徴づけた。

稲の香や山家へと日の差し始め

先の霧雨が止んで、日差しが山家に及び始めた。視覚的な描写
に加え、上五の「稲の香」がえも言われぬ清々しさを伝える。
見事な取り合わせである。

葉に花にひとつひとつや露の玉

このたびの特別作品「露の玉」の題に因んだ作品である。そ
れぞれの葉や花に、その曲面形状からか、確かに不思議と露
はひとつひとつなのである。あたかもひとつひとつの露の玉
がひとつひとつの生命を表しているようである。

秋吉台

暁子

国定公園「秋吉台」は私の生家ほど近く、幼い時から今日に至るまで、折あることに訪ねています。壮大な景観はもちろんですが、希少な野の花も多く、それらを探しながらの野歩きはまた格別です。そんな秋吉台の一年を思い浮かべながら詠んでみました。

山を焼く日和の続く朝かな

焼かれたる野に夕からの雨となる

蝶々のときには岩に止まるなり

夕焼が石の台地を染めにけり

洞を出て遠く近くに蟬の声

大岩に立ちて吹かるる秋の風

竜胆や丘の小道の幾曲がり

穂芒の中より人の現はるる

ドリーネを下つてゆける草紅葉

冬枯の丘の高きに驚飛ぶ

《作品鑑賞》

村上正人

暁子さんは、普段の句会で日常の景を詠まれた作品が魅力的だが、前作の特別作品「秋の旅」でもそうであったように、大自然の中に身を置いて詠まれた句も大いに魅力的である。このたび、幼いころより何度も訪れたとおっしゃる「秋吉台」の、ほんの一部の景かもしれないが、親しみを込めて作品にされた。

夕焼が石の台地を染めにけり

秋吉台に見られるカルスト地形の石は、石灰岩質であるため白っぽい色をしている。草の間にいくつも見られる大きな石は夕焼の色そのものに染まるのである。

大岩に立ちて吹かるる秋の風

カルスト台地の大岩に立つと、周囲に遮るものがない。岩の上で秋の風に吹かれる。そのままの表現であるが、景に身を置く作者の心地よさが素直に伝わってくる。

ドリーネを下つてゆける草紅葉

長年の雨水で浸食された台地の大きな窪みがドリーネである。おそらく秋芳洞の入口なのであろう。白っぽい入口から暗闇に向けて下るのだが「草紅葉」の色がそこに生命があることを思い起こさせてくれる。

鶺鴒の光ゆく谷に魚を釣り

奥山に岩を飛び越す滝見たり

草の花神話の国にこぼれけり

備北へと晴れてゆきたる秋時雨

秋の山我が身をもつて登るなり

秋の日の大地に四肢をゆだねたる

烏瓜ここに暮らしがあつた頃

学校も教会もあり秋の声

茶の花の一つを川に流しけり

大槻見てをれば来る蝶々かな

臥待を待つ間門燈消えにけり

川の辺に穂芒靡く朝かな

山上湖色なき風の吹きにけり

晩秋の玻璃に差し込む夕日かな

まづ何も付けず頂く新豆腐

黒瓦打ちて園栗零れたる

大川に沿へる桜の紅葉して

大川に沿へば時雨るる午となり

宵星に金木犀の香りたる

金木犀香つてゐたる夜更かな

こほろぎの道は山家へとつづき

山毛櫸林を吹きぬけて来る秋の風

秋澄むやひと声鳴いて鴉飛ぶ

畠境の風に野菊の揺れにけり

二十日月待つともなしに上りをり

真夜の窓開けて見上ぐる後の月

稽田にあまねく朝の日の差して

朝寒の窓を過れる鳥の影

鶺鴒の鳴く朝の社を訪ひにけり

川べりによく日の差して棟の実

佐保光俊

村上正人

島尾ひとみ

薄紅葉窓辺にそよぐ昼餉かな

梅檀の実に近くあり朝の月

川岸の豆柿照らす夕日かな

山の端に釣瓶落しの鴉舞ふ

秋の暮中洲に戻る川鷺かな

小振りなる朝顔の咲く十ばかり

三つほど小さき朝顔咲きにけり

秋祭講中出でて幣を張る

川風に秋の祭の幣揺れて

外に出て上限の月見上げけり

秋沙

海霧晴れて沖ゆく船の汽笛かな

日の当たる縁に動かずいばむしり

青空市煙を上げて秋刀魚焼く

柚子切つて指の香りのいつまでも

冬の蠅一匹の居る夕餉かな

チエーンソー止みたる山の暮早し

個展見て帰る坂道日短か

寒月の今上りたる巖島

仏へと庭の冬菊切りにけり

研ぎ終へて包丁光る冬の朝

あざみ

しばらくは石に座りて鵬日和

通り抜けてきぬ橋あり秋の蝶

家事終へてピアノをさらふ月の夜

ばたばたとインコ羽ばたく十三夜

秋風や柵にもたれて鯉を見る

鯉の柄くつきりと見え天高し

城址に立ちて見上ぐる金木犀

空中の虫を蜻蛉の追ひにけり

ちやんこ屋の大き提灯夜の長し

シンバルの長き余韻や暮の秋

亜矢

日の差せる水ゆらぎたるプールかな

庭芝に紛れてゐたる蟋蟀飛ぶ

葛かつらガードレールを這うてをり

芙蓉咲く川辺の道へ連れ立ちぬ

秋日和犬を預けて旅に出る

秋の蝶庭に微かな風の吹き

秋麗や時をり鯉の浮かびきて

石仏に秋の日の差す午下り

秋澄むや小さき鳥居くぐりたる

秋の川小舟の水脈の岸に寄せ

手土産は兄の手になる零余子飯

飼ひ犬のチョッキにあまた草の絮

日記帳広げしままに夜長かな

筏焼く煙の立ちて冬近し

山茶花や手摺を持つて池巡る

寒鯉の丸き体で浮かび来る

寒釣が一人来てゐる中洲かな

俄か雨水鳥集ふ岩の上

バス降りて見下ろしてゐる冬田かな

落葉焚笑顔も見へる立ち話

マウンテンバイク渡りぬ紅葉川

祠へは零余子こぼるる道を行く

水の影美男蔓の辺りまで

秋澄みて遠くにチエーンソーの音

雨音のしばし途切るる夜長かな

船出づる沖は明るくしぐれをり

山茶花の咲き初むる朝掃きにけり

毛糸編む玻璃戸の外は早暮れて

おでん鍋そば降る雨に一日暮れ

振り返る嶺に冬日の懸かりたる

井藤希

栄吉

暁子

石段を萩の寺へとよりたる

裏山に寒蟬の鳴く母の家

髪を切り秋の個展の準備終ゆ

地獄図を掲げる寺や秋遍路

漁釣の竿そのままにうたた寝す

家々も団地も秋の色の中

秋夕焼橋ゆく人の影淡し

温め酒個展の果てて一人酌む

枯蓮田駅のホームに見渡して

空を見て枕を干せり神の旅

楓もみぢの木の紅葉せる道歩きけり

露けしや畑に軍手忘れられ

短日の我が杖の音聞く夕べ

花びらを踏みて山茶花見上げたる

落葉掃く音のしてゐる隣かな

バス停に並ぶ生徒らマスクして

置かれたるマスクは頬の形して

午からは時雨となれる村をゆく

岩山に影を落として冬の雲

郵便を受くる手の先雪ばんば

新しき本屋に入る秋日和

ベランダに見上げてをりぬ朝の月

秋雲やパン屋の列に並びるて

目の覚めて下弦の月を見てゐたり

大杉を見上げてをりぬ秋日和

川の辺に鶉鳴き合ふ暮の秋

雨止みて紅葉濃くなる向う岸

日の昇り桜紅葉の散りにけり

水の音石路の花よりしてゐたる

音立てて木の葉の飛べる旅路かな

新庄憲彦

すみれ

知佳子

わが母校公孫樹黄葉の前に立ち

団地中欄の並木の紅葉せり

玄関の一輪挿しにななかまど

屋敷跡公孫樹黄葉に朝日差し

母の畑鉄柵に沿ひ小菊咲く

庭園の松のすべてに菰を巻き

山茶花や小猿のさるる毛繕ひ

小春日や娘と巡る蚤の市

茶の花や母の生家の静かなり

今年また千枝漬を母つくる

ちどり

林檎剥くるるるると螺旋状

歳時記をしゆりしゆり捲り秋の声

母念に夫は懸崖菊育て

黄落の参道歩く我と鹿

コンサートホール出づれば時雨れけり

ワゴン車のビザの屋台に片時雨

穴道湖の広き水面に浮寝鳥

水鳥の流れに素つて行き過ぐる

ほふふと焼芋割りて冷ましたる

同じ行また読み直す日向ぼこ

友岡崇山子

山茶花の咲き過ぎている平和かな

階段の音は螺旋の小春かな

他人事と狂い花を吹き飛ばす

冬紅葉赤の隙間に夜の闇

初冬や喫茶の雑誌とワインレッド

本枯や倉庫にウイスキー並ぶ

すぐ建った家にかつての柿落葉

山裾に湖グレーに光る冬

今朝の冬試しに二人息を吐く

物干しの下より眺む神無月

ふじ女

乱れ萩だれか通れば散りにけり

吾亦紅雲の流るる方へ揺れ

石榴の実一粒づつを齒でつぶす

墓守のごとくかまつかまつてをり

葭原を揺らし水鳥騒ぎたる

秋日和様子を抱へ庭師くる

松手入終へて風音強くなり

ときどきは窓開け放ち夜学校

晩学の臉を閉づる夜長かな

真夜中の風に芭蕉の破れけり

実石榴に蜂の来てるる角の家

月さやか厨の灯り消しにけり

秋の月静まる街を照らしをり

落ち栗の掃く足先に転がりぬ

運動会遠巻きに見る家族連れ

珈琲の香り楽しむ秋の午後

柿の実の遠くて鶉鳴いてをり

柿なます二日続けて作りたる

堀越しの金木犀の香の強し

薄紅葉づく山里歩きけり

秋耕の鋤振る父の影長し

賄ひの夕餉は父の今年米

新聞を縁に広げて小春かな

茶の花や遠嶺にはかに曇りたる

太き葉に低き音して時雨来る

冬菟母の便りは兄の文字

花八手どちらの家の鬼門にも

冬の日や鶉は兩翼を広げたる

冬枯の電車通りを風の吹く

山門の礎に掃き寄せたる落葉

松田裕子

美耶

森口良樹

城跡も田も西の湖も秋夕焼

秋暁の安土に月の残りけり

ケ―ブルカー落葉の谷を上りたり

秋寒の玻璃戸から見る琵琶湖かな

秋風を近江の鷹の捉へたる

叡山の僧衣へ伸びる秋日かな

鞍の患者手当てす窓に寄り

仕事終へ金木犀の道帰る

曼殊沙華見れば思へる人のあり

綾乃

孫の手がグリーンピースを掴みたる

百合の花受取る子らの髪揺れて

種株に紫蘇一株を残したり

玉葱の赤引き立てるレシビかな

異国の妻戦死の義父の墓洗ふ

灯籠を流して父母を送りたる

宮島をぐるりと囲み牡蠣筏

裏山を華やかにして石路の花

散り敷ける公孫樹落葉を踏んでゆく

英一

秋の空高きに鶯鳴きにけり

秋の薔薇剪つて窓辺に飾りけり

仏前に鶏頭飾り母偲ぶ

石榴の実手折り持たせてくれし兄

仕事終へ見上ぐる空の星明り

石庭の上に紅葉の散り敷けり

石路の花灯りのともる家に着き

土佐寒蘭里の便りの懐かしき

通勤の向うの山に冬の虹

大畑恵

コンビニを出でて真上の月を見る

満天星の紅葉の庭や母の住み

転動の知らせのありて萩を刈る

球根の形を見つめ秋日和

蓮の実のすこし残りて暮れにけり

玄関を出て山茶花を見に行きぬ

日だまりに白山茶花の咲き継いで

次々に咲く山茶花に日のあたる

パン生地のおらむを待つ時雨かな

桑門わかこ

秋霖に静けさを増し今朝の庭

野の花を挿せば戦ぎて秋彼岸

買物は忌のころ草の横通る

散歩道紅葉の上をさくさくと

黄葉の始まる公孫樹見つめたる

芒原通り抜けたる山の宿

ほとんどが刈田となりて田舎道

柿干して軒の賑はふ山家かな

螳螂の枯れてとどまる石の横

宮田保江

菊日和読み止しの本伏せしまま

秋澄むや浅黄斑蝶が庭に来て

賽銭を供ふる音や秋の風

身に入むや夕暮近き寺の鐘

温め酒いつもの店に立ち寄りて

昇る日に背筋を伸ばし今朝の冬

神の留守温泉旅を計画す

冬めくや水底の鯉動かざる

冬田打つ午後から風の強くなり

山野ウタ

秋の薔薇買うて街なか歩きたる

ゆるやかに揺りて菊を売つてをり

鵲猛り雲のひとつもなかりけり

日差よき庭に大豆を干しにけり

水たまり時雨の空を映しをり

晴天や積つてゐたる朴落葉

積りたる落葉を踏めば日の匂ふ

高空に鳥の一羽や大根引く

大橋博子

車窓から振り返り見る桔梗かな

大阪のビルの間の照景かな

とりどりの菊の置かれて三の丸

大輪の菊の周りを子の走る

そここの軒に来てゐる冬の鳥

上島康子

畦道を眺めて歩く菊日和

玄関に並べられたる菊の鉢

山を越え流れて来たる時雨雲

夕時雨先行く人の遠ざかる

窓を拭きカーテン洗ひ冬麗

樫子

立冬や座して読みたる古日記

寒鴉飛び立つ影やサッシ窓

冬枯や砂場に赤い靴ひとつ

湯豆腐を一人でつく夜の静か

鯛焼の列に並び足踏みす

村上理江

打ち時雨る合間ぬうての畑仕事

山寺の満天星つゞ紅葉せる

北窓を塞ぐ一人の二階部屋

憂きことの重なりて夜のしぐれけり

紀英子

宵闇の教会に聴くカルテット

夕月が真上に懸かり菊香る

茶の花や金槌の音遠くより

山茶花の散り敷く庭に鞆置く

高嶋銅代

残菊の蕾をあまた残しをり

干し物に紅葉一枚散りにけり

山茶花を百歳の人見上げたる

時雨虹わが前に立ち足止める

ちかこ

木洩れ日のあたつてゐる木の葉かな

無造作に束ねられたる小菊かな

しぐるるや二駅三駅ゆくあひだ

青空の见えて北口しぐれけり

穂高

川底に紅葉集まる仏通寺

石段の幅は不揃ひ色葉散る

引越の荷運びをれば時雨れけり

時雨虹立つたとニュース告げてをり

山崎桂子

菊日和小津作品を見ると決め

若き日に通ひし茶房蔦紅葉

電話して裏木戸出れば片時雨

遠藤さつき

熊本は城も城下も黄葉して

城を見る人の意口や黄葉散る

黄葉散り路面電車は濠に沿ふ

熊谷ゆり子

渡柿の皮を山ほど剥きにけり

ふるさとの宅配便は芋づくし

会場の外も香りて菊花展

民

大輪の菊を日に日に眺めたる

脇役の小菊の匂ふ菊花展

まなざしの夫に似し孫菊香る

みさ子

武蔵野の傍水に沿ふ草黄葉

高き枝に残りて柿の赤きかな

きらきらと白線に降る初時雨

やす保

さざんかの満開の花明るいよ

通園の子達の通る寒き朝

かこ

わが庭の決めた場所から星月夜

時雨来て敷石の黒なほ黒く

津田玲子

令和三年十月度作品集より

井藤 希 私の選んだ十句

秋の蝶露のひと粒吸ひにけり	佐保光俊
雨の音静まりてよりちちろ鳴く	村上正人
月今宵いつしか時の過ぎにけり	高尾ひとみ
工場の灯の連なりて月の雨	あざみ
木々の葉のひるがへりては秋気満つ	すみれ
雲切れて満月の端見えてくる	松田裕子
鬼やんま石灯笼に廻おろす	美耶
師の舞を見つめてゐたる月夜かな	綾乃
松籟の濠に揺れけり今日の月	山野ウタ
名を知らぬ木の実たわわな坂上る	大橋博子

大橋博子 私の選んだ十句

風のなか村の外れの通草引く	佐保光俊
雨の音静まりてよりちちろ鳴く	村上正人
小望月呉姿々宇山に昇りけり	秋沙
晩秋の雲の低きを歩きをり	あざみ
じやんけんの大き声して天高し	亜矢
秋の蚊のページをめくる風に揺れ	栄吉
役終へて棒に戻され案山子かな	友岡案山子
団栗に園児の列の乱れたる	森口良樹
ひと風に舞ひ上がりたる草の絮	山野ウタ
川土手に杖つくタベ柳散る	阿姫